

65歳以降も働こう!!

65~75歳の仕事・年金7パターン

	65~70歳	5年累計	70~75歳	10年累計	75~85歳	20年累計
A. 65歳まで働き、65歳から年金生活						
給料(年間)	—	1000万円	200万円	2000万円	—	4000万円
年金(年間)	200万円	—	—	—	200万円	—
B-1. 70歳まで「チャイロ働き」、年金は65歳から						
給料	100万円	1500万円	200万円	2500万円	—	4500万円
年金	200万円	—	200万円	—	200万円	—
B-2. 70歳まで「フルタイム」、年金は65歳から						
給料	300万円	2517万円	208万円	3557万円	—	5637万円
年金	200万円	—	208万円	—	208万円	—
B-3. 70歳まで「フルタイム」、年金は5年繰り下げ70歳から						
給料	300万円	1500万円	—	2960万円	—	5880万円
年金	—	—	292万円	—	292万円	—
C-1. 75歳まで「チャイロ働き」、年金は65歳から						
給料	100万円	1500万円	100万円	3000万円	—	5000万円
年金	200万円	—	200万円	—	200万円	—
C-2. 70歳まで「フルタイム」、70~75歳は「チャイロ働き」、年金は5年繰り下げ70歳から						
給料	300万円	2517万円	100万円	3460万円	—	6380万円
年金	—	—	292万円	—	292万円	—
C-3. 75歳まで「フルタイム」、年金も10年繰り下げ75歳から						
給料	300万円	1500万円	300万円	3000万円	—	6760万円
年金	—	—	—	—	376万円	—

※B-2は2022年4月施行の「在職定時改定」を考慮、C-3の年金10年繰り下げは65年29年4月から

調する。「人生100年時代の老後は、もはや「余生」を大きく超えています。一生懸命節約して貯蓄し、一部を資産運用に回しても、それで十分とはいえない。

なくなってきました。私はこれからの老後を生き抜く最も重要なキーワードは「自助」だと思っています。そして、その自助の最大のものが、いつまでも元気で働ける力

なので。老後の三つの不安といえば「お金」と「健康」そして「孤独」ですが、働いていればその間はこの三つすべてを解消できます。

働き方さまざま 魅力的な収入増

65歳までの雇用が当たり前になり、70歳までの就業機会の確保が今年度から法律で企業に努力義務化された。「長く働く」ことの焦点は今、「60歳代後半」に移っている。元気な高齢者たちの姿を見ると、「その先」を見据える必要性も感じる。65歳以降も働く生活とはどのようなものなのか。何事も「モデル」があるとイメージがしやすい。そこで、アクティブに暮らせるという意味で、老後の「黄金期」を65~85歳の20年間とし、冒頭のAさんのように、前半の5~10年を主に働いて社

会活動をするという前提で考えてみよう。いつまで働くか、どう働くか、そして年金は何歳からもらうか——この三つを軸に老後の姿をパターン化すると、大まかな生活のタイプが浮かび上がってくる。これまでと同じく65歳で仕事を辞めて年金生活に入るタイプを従来型(A)とする。働く期間は「70歳まで」と「75歳まで」の2通り、働き方は週5日の「フルタイム」とアルバイトを含む「チャイロ働き」のいずれか、そして年金は「65歳から」5年繰り下げて「70歳から」余裕がある人のケースとして10年繰り下げて「75歳から」の3通りとした(年金は1ヵ月繰り下げることに0.7%増額。現在は70歳まで、来春に75歳までに拡大)。70歳まで働く場合は、次の3パターンだろう。

年金を受け取りながら使えるお金が最大2700万円増!

「お金」「健康」「孤独」3大不安を解消

高齢化の進展で65歳以降の「長く働く生活」が注目されている。フルタイムからアルバイトを含む「チャイロ働き」まで働き方はさまざま。年金のもらい方と組み合わせれば、「ゆうゆうリタイア」も見えてくる。家計への影響や、どんな働き先があるのかを見てみよう。

東京都内のAさん(69)は、すでに75歳までの「活動」が決まっている。「約8年間、通信機器メーカーの顧問として働いてきましたが、今年の暮れに70歳になるのを機に辞めようと思っています。次はNPO活動に取り組みます。数年前に関わりを持つようになった一般の方の相続のお手伝いをする組織です」

来春、そのNPOの要職に就くことが内定している。5年間は深い関わりをするつもりなのだ。

Aさんは60代の人生をすべて自分で切り開いてきた。

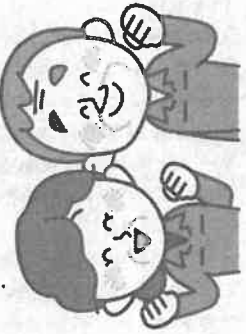
長年勤めたメーカーは、60歳定年ですっぱり辞めた。自由を謳歌して気ま

ま暮らしていたが、すぐに飽き came。外国人に日本語を教えるボランティアを始めたり、生活に役立つ資格を取ったり……。ひよんなことから旧知の通信機器メーカーの社長と再会できた。「つきあっているうちに顧問として手伝って」と誘われたんです。週3日勤務でしたが、やっばり生活が変わりましたね。働いていると生活にリズムが出ます。毎日やることとあるのは気持ちがいいものです。もちろん日本語ボランティアや資格を生かした活動も、ちゃんと続けていました(Aさん)

年金は60歳代前半からしっかりと受給した。顧問

の収入は月十数万円。ほかに家賃収入もあるため、顧問分は家計ではなく自分の「おこづかい口座」に入れた。月々使う分は自らの稼ぎで十分賄えた。「結局、60代の間働き続けたおかげで、現役時代に準備した貯蓄にはほとんど手を付けずにすんでいます」(同)

Aさんの生き方は、二つの意味でこれから高齢期を迎える60代、50代の人にとって参考になる。一つは「社会活動」。働いたりボランティアをしたりで、常に社会と関わり続けている。もう一つは、それを収入につなげられたこと。月十数万円の顧問料は現役時代の給料に比べれば低いが、8年間続けると、それでも千数百万円になる。「定年3・0」などの著書があり、老後ライフに詳しい経済コラムニストの大江英樹氏が、高齢期に働くことの意義を強



戻れなくなってしまからです」

準備として大江氏が勧めるのは、会社以外の人との付き合いを増やすことだ。コロナ禍の今は難しいが、趣味や遊び、フェイスブックのオフ会などなんでもいいので、さまざま集まりに参加して人との「つながり」を深めてほしいという。

「ベンチャー企業の経営者たちに話を聞くと、その分野では優秀だが、お金の勘定や営業に疎い人がいっぱいいます。IT企業では、システムには詳しいが、そのシステム

年金を65歳からもらいながらチャヨイ働きのタイプ(B-1)とフルタイムで働くタイプ(B-2)、そしてフルタイムで働いて年金は5年繰り下げて70歳からもらうタイプ(B-3)だ。

75歳まで働く場合は、組み合わせはいろいろあるが、年金をもらいながら10年間ずつとチャヨイ働きのタイプ(C-1)、70歳まではフルタイムで次の5年間はチャヨイ働き、年金は5年繰り下げて70歳からのタイプ(C-2)、ずつとフルタイムで年金も10年繰り下げて75歳からのタイプ(C-3)の三つが主になりそうだ。

まずはお金の面である。収入はフルタイムが一年取300万円、チャヨイ働きが「年100万円」、年金は老齢基礎年金と老齢厚生年金で「65歳時、年200万円」の平均的な元会社員を想定。AからC-3までの7パター

ンについて黄金期20年間の収入を試算した。

23页の一覧表がその結果である。ご覧いただければ一目瞭然改め「働く」と「年金」繰り下げ」が家計に絶大な効果を生むことがわかる。

従来型Aの20年間の収入が4千万円であるのに対し、75歳までフルタイムで働き年金も10年繰り下げるC-3は6760万円にもなる。Aより更に約2700万円も多い。70歳までの5年間「働く」と「繰り下げ」の両方の効果を出せるC-2、B-3がそれぞれ6380万円、5880万円です。フルタイムで5年間働くB-2も約5600万円まで伸ばせた。

生活費を年300万円(月25万円)として配偶者の年金を別に考えると、Aの全期間、B-1・2の70歳以上、C-1の75歳以上は年100万円単位で貯蓄を取り崩さなければならぬが、これはB-1・2は5年間、C-1は10年間、取り崩しを始める時期を遅らせることができたと思えるべきだろう。C-2の70歳以上は、取り崩すところが逆に貯蓄ができる。

チャヨイ働きなら趣味を楽しめる

これだけ美入りが増えるのだから、金銭面から見ると65歳以降も働く生活はとても魅力的だ。気になるのは働き口だが、これこそ人それぞれだ。

リタイアメントライオンに詳しいファイナンシヤルプランナーの澤木明氏は、誰でもチャレンジできる手法としてチャヨイ働き(B-1、C-1)を勧める。

「60歳代前半はともかく65歳や70歳を過ぎてくると、体力的には働くのがきつくなってきます。だ

からフルタイムよりも短時間労働を考えたほうがいい。週3日、1日6時間程度働くパートやアルバイト的な仕事です」

パート・アルバイトの時給は現在千円強(東京の場合)だから、この働き方だと週に2万円弱、月で7万〜8万円になり「年100万円」がほぼ達成できる。

「これくらいの仕事なら働き口はいっぱいあります。都会なら鉄道の駅近くにある駐輪場の管理人や、公共施設、公民館や体育館の受付などです」(澤木氏)

東京しごとセンターが出している「シニアのしごとガイド」によると、このほかマンション管理や調理補助、介護ヘルパー、警備などが候補になりそうだ。

「会社員時代のプライドを氣になさる方がいらつしやいますが、そんなものは早く捨ててしまつた

ほうがいい。私の知っているケースでは、シルバー人材センター経由で製品検査のお仕事をなさっている大手企業の元部長さんがいらつしやいます」(同)

ゴルフ好きなど、しっかりした趣味を持っている人で、仕事がない日を趣味に充てたい場合などにびびりださう。趣味にかかるとお金を仕事で稼げれば最高だ。

「まだまだ若い」とフルタイム(B-2・3、C-2・3)で働きたい人もいるだろう。先の大江氏は大手証券会社の出身で、自ら60歳の定年後に起業した経験を持つ。

「65歳以降も会社で働くつもりなら、そうできるように準備しておくべきです。再雇用で働いている場合は、再雇用の働き方に安住してはいけません。プレッシャーや責任があまりない状態に慣れてしまうと、元

を採用する業界がわかってない会社もあります。付き合いを広くして高くアンテナを張っていれば、そんなところから誘いの声がかかる可能性が出てきます」(大江氏)

「転職」を視野に入れるのが大江氏の特論だが、今の会社で働く道はどうか。先に触れた法律で努力義務となった70歳までの就業機会確保である。

業務委託を検討 実務中の会社も

定年後研究所の池口武志所長によると、4月からは現実に法律が施行されると企業の態度に変化が出てきているという。

「まだ様子見が多いが、大手企業で前向きに考えていくところが出ていこうとすることが始まっています」

今春開かれたセミナーで行った人事担当者へのアンケート調査では「他社動向を注視」が半数近

くを占めたものの、70歳までの就業機会の確保を「すでに実施」と回答したのが10%、「具体案を検討中」も22%あった。約3分の1が「具体案」まで進んでいるのだ。

さらに、その具体案の中身を尋ねると、「再雇用」が半数強、次いでともに約2割で「業務委託」と「定年延長」が続いた。「業務委託」は今回の法改正で加わった就業確保策の一つで、具体的な仕事を指定して契約で請け負わせる方式だ。

「アンケートとは別に約30社の人事にヒアリングも行いましたが、そこでも業務委託検討の声を複数聞きました。すでに実際の社員を使って実験している企業もありました」(池口所長)

うまく仕事を切り分けできれば、該当社員の得意分野に仕事を割り振るなどで業務委託は十分成り立つ。池口所長による

と、65歳以降は社員ごとに健康状態に差が出てくるため、再雇用で「週3日制」や「1日5時間コース」などの新設を検討する企業もあるという。

業務委託もそうだが、近いうちに今の会社でもチャヨイ働き(B-1、C-1)ができる時代が来るかもしれない。

さらに今の50歳代には、次のようなチャンスさえ想定できる。

「中期的には、高齢社員を管理職で処遇し続ける企業が aumentato といわれています。2000年前後約10年間の就職氷河期時に採用をやめた影響で40歳代の層がうすくなるから企業数が数多くなるからです。管理職が足りなくなるところに高齢社員を活用しようという構図です。すでに退職定年を廃止する企業が自立し始めています」(同)

企業人事に詳しい関係者に聞くと、伝統的な大

企業の中に、こうしたいびつな人員構成をひきずつたままの企業があるという。心当たりのある50代の方は、すぐ自社を調べたほうがいい。未来への「希望」が湧いてくるかもしれない。

どうやら、今の会社で働く道は先へ行くほど展望が開けそうだ。

規則正しい生活が送れて、人と接することもできる。体を動かし、お金まで稼げる——冒頭で大江氏も強調していたが、とにかく高齢期の労働はいいことだらけだ。

そして、長く働けば働くほど最後に思わぬ副産物)が生まれる可能性さえある。老後の黄金期が終わるころ、準備していた老後資金が「余っている」ことに気づくかもしれないのだ。「そうなら、何に使おうか」を考えるだけでワクワクしてはこないか。

本誌・高藤由之